

4段階評価である。

(点検・評価の結果)

1. 教育効果の測定

上述の代替的な基準によれば、2004年度より大学紀要へ大学院学生の単著での論文投稿が可能になったため、大学院学生の研究論文の発表や学会報告は増加している。その点では、教育・研究指導の効果が現れているといえる。

2. 修士課程、博士課程修了者の進路状況

修士課程、博士課程とも人数が少ないので、その評価は難しい。しかし、修士課程修了者の多くが民間企業や公務員に就職しているのに比べ、博士課程への進学者が相対的に少ないこと、そして博士課程修了者の研究職への就職状況が厳しいこと、したがって、大学院研究員として多くの大学院学生（いわゆる、OD生）が残っていること、などは大学教員や研究機関研究員の労働市場の特殊性もある程度考慮しなければならないが、研究者養成機関としてのあり方を検討する必要性を示している。

3. 成績評価法

学部教育の成績評価法を大学院教育のそれに直接、対応させることはできない。しかし、従来のような「優」、「良」、「可」、「不可」の4段階評価では、不透明な点が多く、適切とはいえない。

(改善の具体的方策)

まず、教育効果の測定に関連するとともに、修士課程・博士課程の進学・就職状況の改善のためにも、次のような方策の検討が必要と思われる。専門分野にもよるが、大学紀要への論文掲載が必ずしも重要な研究業績とは認められなくなっている現状では、査読つき（海外）専門雑誌への投稿を促進させ、そのための教育指導（例えば、英語論文作成の補助など）をめざす。

次に、成績評価も、従来の「優」、「良」、「可」、「不可」の4段階評価から、「秀」を入れて、より詳細に5段階評価にし、その上で講義・演習科目について厳格な成績評価のための基準作りを行う。また、今後国際交流（留学送り出し・受け入れ）の進展にともない必要となるGPA制度の導入も視野に入れる必要がある。

5.2.3.5 教育の質の向上

【評価項目 6-5-1】 教育改善への組織的な取り組み（教育・研究指導の改善）

- (必須要素) 教員の教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組み状況
- (必須要素) シラバスの作成と活用状況
- (必須要素) 学生による授業評価の活用状況
- (選択要素) 学生満足度調査の導入状況
- (選択要素) 卒業生に対し、在学時の教育内容・方法を評価させる仕組みの導入状況
- (選択要素) 高等教育機関、研究所、企業等の雇用主による卒業生評価の導入状況

<2003年度に設定した目標>

1. 大学院教員による組織的な教育・研究指導方法の改善
2. 授業内容や成績評価方法を明記したシラバスの作成
3. 大学院学生による授業評価の実施とその結果の公表

(現状の説明)

1. 教員の教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組み状況

学部教育と異なり、大学院では専門性に重点が置かれるため、教員による組織的な教育・研究指導方法の改善への取り組みには至っていない。しかし、別な形ではあるが、2004年度春学期からランチ・ワークショップ（以下、LWS）と呼ばれる、研究報告会を昼休みの時間帯を利用して月1、2回のペースで開催している。2004年度は10名が報告を行った（報告者と報告論題は、関西学院大学大学院経済学研究科研究会WEB (<http://members.ld.infoseek.co.jp/kgu-gse/lunch/lws.htm>) において公開されている）。

LWS参加者は大学教員と大学院学生であり、基本的には大学院学生が報告し、それについて大学教員や他の大学院学生がコメントする形式をとる。この研究会は次のようなメリットがある。① 様々な専門分野の教員が参加するので、多様な視点からの研究指導が行われる。したがって、他の教員の指導方針の情報交換の場ともなる。② パワーポイントやOHPの活用を義務付けているので、大学院学生のプレゼンテーションの訓練の場になる。③ 昼休みの時間を利用しているため、教員・大学院学生ともに授業時間を確保できる。

2. シラバスの作成と活用状況

研究科執行部が中心となって2004年度から博士課程前期課程の講義科目ならびに研究演習科目のシラバス作成について検討をしている。シラバスのおもな内容としては、講義目的、各回の講義内容、授業方法、成績評価方法、教科書・参考書などを記す形式で、2005年度からホームページ上に公表する予定で進んでいる。

3. 大学院学生による授業評価の活用状況

現段階では「授業評価」アンケートは行われていない。その理由として、学部と異なり、大人数の授業が少ないこと（コア講義科目でも、多くて10数名程度）、専門分野によって授業方法などにかなり違いがあること、授業評価アンケート実施の困難さ（匿名性の確保ができない、など）があげられる。

(点検・評価の結果)

1. 教育・研究指導方法の改善の組織的な取り組み状況

2004年度春学期から開始されたLWSは円滑に進んでおり、例えば、学会報告の予行演習ができるため、大学院学生の学会報告者数が増加した、などの成果につながっている。

2. シラバスの作成と活用状況

2005年度春学期から博士課程前期課程のシラバス公表に向けて進行中である。

3. 大学院学生による授業評価の活用状況

具体的な「授業評価」アンケート方法など、実施上の問題があり、進んでいない。

(改善の具体的方策)

1. 教員の教育・研究指導方法の改善の組織的な取り組み状況

2005年度以降は、LWSの開催数を増やすだけでなく、複数の教員による指導に基づく専門分野別のワークショップの開設に向けて研究科執行部を中心に検討中である。

さらに、今後、大学院教育における高度専門職業人養成に重点が置かれるようになることを考慮すると、講義科目の充実が必要となる。その場合、個々の教員の能力に頼るのではなく、標準的な教育指導方法が教員間に共有されることが望ましい。したがって、研究科執行部を中心に、教育・研究指導方法の教員同士の情報交換など、組織的な取り組みについて検討する。

2. シラバスの作成と活用状況

2005年度から博士課程前期課程のシラバス公表を実施する方向で進んでいる。

3. 大学院学生による授業評価の活用状況

大学院教育への多様な要求が個別には見受けられ、各教員が個々に対応しているというのが現状であり、加えて、こうした状況が大学院教員全体の共通認識になっていない。こうした点を鑑み、授業評価のフォームや実施方法などの検討を通じて、大学院教育の改善につながる共有情報を作成し、その結果を活用する。

5.2.3.6 学位授与・課程修了の認定

【評価項目 6-6-1】 学位授与

(必須要素) 修士・博士の各々の学位の授与状況と学位の授与方針・基準の適切性

(必須要素) 学位審査の透明性・客観性を高める措置の導入状況とその適切性

(選択要素) 修士論文に代替できる課題研究に対する学位認定の水準の適切性

(選択要素) 学位論文審査における当該大学(院)関係者以外の研究者の関与の状況

(選択要素) 留学生に学位を授与するにあたり、日本語指導等講じられている配慮措置の適切性

【評価項目 6-6-2】 課程修了の認定

(必須要素) 標準修業年限未満で修了することを認めている大学院における、そうした措置の適切性、妥当性

<2003年度に設定した目標>

1. 課程博士の学位取得を推進する。
2. 論文博士の学位取得の機会を学外者に対しても広げる。
3. 学外の学識者に博士学位審査の副査としての協力を積極的に依頼する。
4. 英語による授業等を増やすことにより、留学生が学位取得を実現できるように研究体制を整える。
5. エコノミスト・コースに関しては短期間での修士学位の授与を推奨する。